

## 麦門冬湯

処方: 麦門冬 半夏 人參 甘艸 粳米 大棗

### I. 特徴

#### 1) 麦門冬湯とは

麦門冬湯は、張仲景が著した『金匱要略』の肺痿肺癰欬嗽上気病篇が出典で上記六味からなる。仲景の処方には主薬の名を転用したものが多く、当方も主薬の麦門冬から命名された処方といえるが、仲景方で麦門冬を方名に持つものは当方が唯一である。『金匱要略』は麦門冬湯を「大逆上気、咽喉不利」に、同じ仲景の『金匱玉函経』は「病後の労復発熱」に用いる。しかし、『傷寒論』に当方はない。一方、麦門冬湯から大棗を去り、竹葉と石膏を加えた竹葉石膏湯は、『傷寒論』『金匱玉函経』にあるが『金匱要略』にはない。この竹葉石膏湯は白虎湯の変方とみなすこともできるが、方意からすると麦門冬湯の類方と考えられる。また、麦門冬を含む仲景方は計5処方あり、他に炙甘草湯が『傷寒論』『金匱玉函経』『金匱要略』に、温経湯と薯蕷丸が『金匱要略』に載っている。以上の麦門冬湯・竹葉石膏湯・炙甘草湯・温経湯・薯蕷丸の構成をみると、**麦門冬・人參・甘草**の3味が共通する。これは麦門冬を含む仲景方の構成の特徴と思われる。

本処方は、基本的に特定のタイプの咳込みに用いる処方である。気道の乾燥感を伴う発作的な強い咳込みと咽喉不快感を特徴とする。感冒による気管支炎で解熱後に咳だけが残った場合に使用することが多い。気道過敏性が亢進した状態という考え方もある。臨床的にも、タバコの煙や冷たい空気を吸い込むなど、少しの刺激で咳込むと訴える者が多い点からも、理解できる。西洋医学の鎮咳去痰剤が無効な症例に著効を奏することがあり、呼吸器疾患の方剤として有効性が高い。

漢方医学的には2つの側面を持っている。1つは、『金匱要略』の条文「大逆上気」に用いるとする考えである。「気」は、一種の生命活動エネルギー

のようなもので「働きだけがあって形のないもの」で、これが体内を運行して身体を生ある状態に保つと考えられてきた要素である。「気」に関わる異常のひとつとして、「気」が下半身から上方に強く逆上し、いわゆる「大逆上気」となり、それが咳という形をとるという考え方である。同様に、咳込んで顔面を紅潮させたり、結膜を充血させることを、エネルギーである「気」が逆上したためと解釈する。本処方のもうひとつの側面は、気道の滋潤剤という面である。通常、ほとんど喀痰がないことから、気道の乾燥がベースにあり起こる病態と考え、これに対し使用するのを滋潤剤とする。これらふたつの考え方が臨床的には理解できるが、その病態は「気」が逆上することにより気道が乾燥すると考えるとよいのだろうか？

〔構成生薬〕 麦門冬、人參、粳米には強壯および滋潤効果、半夏は去痰、“利水”(水分代謝異常を調整する)効果、大棗と甘草には「急迫を治する効果がある」とされる。

#### 2) 使用目標と応用

症候としては、欬嗽が主たる目標であり、前述のように、発作的に咳込むこと、痰はほとんどなく咳の最後に少量でること、最後に嘔吐しそうになるほど強い咳込みであることが特徴である。特に空気の乾燥する冬期に使用する頻度が多いようだ。咳の性状はACE阻害剤の副作用で起こる咳と類似する。咳込みと咳込みの間には、咽喉に何かへばりついているように、ムズムズと不快に感じると訴える者が多い。咳の有無に関わらず、嘔声になっている者にも用いる。

体質的には、やや虚弱者から中等度のものまで幅広く使用できる。服用しやすく、胃腸障害などもほとんどない。ただし、非常に胃腸虚弱で高度に痩せた者では下痢を起こすことがあり、注意が必要である。

応用としては、感冒後などの気管支炎、気管支喘息などが主たるものである。滋潤剤の一種という考えから、嘔声、ドライアイ、シェーグレン症候群などに使用する試みもある。

## II. 論説

### 1) 原典について

[原典]『金匱要略』肺痿肺癰欬嗽上気病篇

[条文]「大逆上気、咽喉不利、逆を止め、気を下すは、麦門冬湯之を主る。」

[解釈]大いに気が逆上して、咽がつまったように苦しい者には、逆上を止め、気を下すために麦門冬湯がよい。ここには、咳という語句はないが篇名に欬嗽上気とある。

### 2) 中国医書の記載

宋の陳言の『三因極一病証方論』には、「大逆上気、喘急、咽喉利せざるを治す。逆を止め、気を下す。」(巻之十三・麦門冬湯)とあり、『金匱要略』の記載に喘急という語が加わっている。後の諸説に喘息に用いるようになったのは、これに起因するものであろうが、『太平惠民和劑局方』『婦人大全良方』『濟生方』『医学正伝』『古今医鑑』『万病回春』などにおいて、欬嗽、痰飲、喘息などを扱った部分に、この処方の記載はない。

### 3) 江戸時代の医家の論説

福井楓亭(1725-1792)は「麦門冬湯は、上気して呼吸がせわしく、咽喉に喘鳴がある証を目標に用いるとしている」、「老人で、体液が枯渇し、食べ物が咽につまる、食道通過障害(膈病)と似た症状」あるいは「大病後に水を飲むことを嫌い、咽喉にぜりつき(喘鳴)がある者」などに使用するとある。また、この処方が「体液を潤す」といっている。

目黒道琢(1739-1798)は、「この処方は“外感”(外因性疾患、感冒など)であれば発汗などを経過し、また持病の喘息の類でいろいろな治療を受けたために、体液が枯渇し、そのために咽がつまり不快で、ゼエゼエと音がすることを目標に使用する。麻杏甘石湯、小青龍湯加石膏などの喘と、麦門冬湯あるいは蘇子降気湯を用いる“痰喘”(気管支炎、喘息など)とは喘の病態が異なる。大抵は喘の様子で虚実を判定ができる。しかし、鑑別に難渋することもある。」「“肺痿”(肺結核などの慢性呼吸器疾患)の欬嗽に有効であり、老人、虚弱者の喘咳には、特に効果のある者が多い」(『餐英館療治雑話』)

和久田叔虎は、「欬嗽があるから喀痰がでないで、咽喉不利して声がおおらかでなく、あるいは声が囁れる者」(『腹証奇覽翼』)に用いる。

有持桂里(1758-1835)は、『校正方輿輿』の中で、「虚証で瀉心湯を用いたい“癩(神経症)”に使用できる」とし、また“肺痿”に用いるとして「葛洪の『肘後百一方』には、肺痿にて咳唾涎沫止まず、咽燥いて渴するを治すと云い、『聖濟』には、虚勞、煩熱、口乾舌燥、水を飲むを得んと欲するを治すと云う。これらの言、参考すべし」とあり、また黄連、地黄を加えて“咳血(咯血)”に用いると言う。

宇津木昆台(1779-1848)は、『金匱要略』の条文の上に肺痿の二文字を置いて理解すべきである。麦門冬湯の証は、咳も喀痰もなく、逆上が強いため、咽喉、口、舌ともに乾燥して潤いがなく、口の中から咽喉のあたりまで粘稠な痰があるように感じて咽喉の心地が悪い証である(『古訓医伝』)

百々漢陰・鳩窓は、欬嗽に用いる場合、「気が逆して咽喉から胸郭の間の具合が悪いときに用いる。(中略)とかく逆気で喘咳と咽喉不利があり、食事をしにくいという人によい」(『梧竹楼方函口訣』)とする。その他には、「妊娠中にもものに驚いたはずみに胎児が動き、腹が痛んで流産しそうなきにも用いる。子宮出血があれば芎歸膠艾湯」と述べている。尾台榕堂(1799-1870)は、「久咳勞嗽、喘滿短氣、咽喉不利、時に悪心嘔吐する者を治す」(『類聚方広義』)という。

本間棗軒(1804-1872)は、「“痰飲”でも“虚勞”でもなく、咳が長く止まないもので、なお実する者は小青龍湯、と麻杏甘石湯の合方が神驗がある。(中略)また、苓甘姜味辛夏仁湯を用いるとよい。(中略)既に虚する者には、麦門冬湯、清肺湯、(中略)などから選択して用いるべきである」(『内科秘録』欬嗽)とする。

浅田宗伯(1815-1894)は、「この処方は『肘后方』に云う通り、“肺痿”で欬嗽、喀痰が止まず、咽が乾燥して渴する者に用いる」とし、「“肺痿”、“頓嗽”(百日咳)、妊娠中の咳込みなど、咳があつて“大逆上気”するときに用いる」、「“咳血”(咳をして咯血す

る)には石膏を含む処方を用いるが、虚弱者や衰弱した者には石膏を長く使うと食欲がなくなるので麦門冬湯に地黄、阿膠、黄連を加えて使うと良い、「老人で、のどがカラカラに渴いて食物が咽に詰まり、“膈症”(食堂癌など)のようなものにも用いる」(『勿誤藥室方函口訣』)

#### 4) 現代の論説

大塚敬節; 麦門冬湯について(漢方と漢薬 1935)

「麦門冬湯は沈明宗がひそかに議して肺痿の主办方とした方剤で、予はしばしば此の方剤を肺結核患者に用いて効を得る〜」自己の経験を総覧するに、麦門冬湯は気管支喘息に応用せられる場合は少なく、肺結核に使用せられることが多い。」

木村長久ほか; 麦門冬湯に就いて(漢方と漢薬 1938)

「此の方の目的は滋潤にあると思います。(中略)最も多く欬嗽に用います。その欬嗽の状態は乾性、痙攣性のもので喀痰が少なき場合、喀痰があっても咽喉辺りに乾燥感があって喀出困難を伴う者に用います。(中略)感冒後の声嘎れにもよく奏効します。(中略)柴胡剤を用いてなかなか下がらない熱が反って麦門冬湯で下がる場合があります。(中略)胃腸虚弱で留飲があり下痢しやすい者に用いると下痢を起こす場合があります。欬嗽の患者では水様の痰が多く出る者に用いると益々痰が増し、具合の悪いことが多いようです。〜」

大塚敬節『症候による漢方治療の実際』

めまい(麦門冬加石膏として記載)、くしゃみ、咳込み、のばせの各項に記載がある。このうち、咳込みの項には、「咳がのどのおくにへばりついたようで、発作性に強くせきこむものに用いる。(中略)咳の出ないときは、半時間も一時間も出ないが、出はじめるとあとからあとからひっきりなしに出て顔が赤くなるほど咳こみ、へどが出そうになる。場合によっては吐く。そして痰らしいものは出ない。このような咳が永く続いて声が嘎れていることもある。〜」

### III. 症例

#### 1) 乾咳に麦門冬湯

[症例]56歳、女性。[現病歴]今度も風邪が治って

から1ヶ月たつのに、咳だけがとれない。痰はほとんどない、乾咳である。咳は、出ない時には全くでないのに、いったん出はじめると止まらない。むせるようにコンコンと続けて出て、顔が真っ赤になり、最後にエーと声を出して吐きそうになる。あまりひどいので、なんとか咳をしないようにするが、のどの奥がムズムズしてくると我慢できない。線香の煙や、香水の香りでたちまちむせて咳が出はじめる。特にタバコは、もともと大嫌いであるが、近くで吸われると、煙にむせるので逃げて歩いているという。咳は昼間にひどく、夜間寝ている時は出ないともいう。かかりつけの先生にいろいろ治療してもらったが、このしつこい咳には一向に効果がない。先生は「胸のX線検査では異常がないから、そのうちに治るでしょう」といわれるだけとのこと。しかし、日がたっても咳のおさまらる様子はなく、最近では電話にもでられないとかで、すっかり困り果てて来院した。[経過]この患者さんの訴えを聞きながら、私は思わずニヤツとしかけるのをおさえた。漢方を少しかじった人なら、それが典型的な麦門冬湯証であることはあまりにも明らかであったから。すなわち、麦門冬湯を投与。1週間後、「とても具合がよい」と患者は喜ぶ。そのまま、患者の希望により同湯を継続。1ヶ月後、体全体の調子が良くなったといって廃棄した。その後、この患者の紹介者からも丁重にお礼を言われた。漢方を知っていてよかったとつくづく思った次第である。(松田邦夫)

#### 2) 「呼吸が苦しい」という患者

[症例]59歳、主婦。[主訴]呼吸が苦しい感じ。[現病歴]平成元年末、感冒に罹患。咽頭痛などは数日でよくなったが、いつも息苦しい感じが続いて3週間以上になる。のどにいつも痰がつかえている様な感じが治らず辛い。実際には痰はあまり出ない。他院で胸部レ線上の異常はないと言われた。今はなにも薬を飲んでいない。以上のように訴える。咳に言及しないので尋ねると、少し出て、むせるような咳であると言う。[経過・考案]はじめ、「息が苦しい、のどに痰がつかえる感じ」と聞き、「これこそ咽中炙癩。半夏厚朴湯!!」と思った。次いで、「感冒に引き

続いて気管支炎もあるだろうから柴朴湯か」とも考えた。しかし、むせるような咳という点が気になった。それならば麦門冬湯だろうか、それにしても、咳が少ない上にいかにも軽そうだが、と迷う。結局、感冒後のむせるような咳に麦門冬湯が有効であった時、のどに何かつまって息が詰まるような不快感があったという自己経験を思い出し、麦門冬湯を選択した。7日分服用後に来院。「大分よい。息苦しさが軽くなって、ほとんど感じない。咳もない。」と言う。服用後どのくらいで楽になったか尋ねると、3日目ぐらいからと言う。さらに本人の希望により1週間分投与、これで治癒した。(稲木一元)

### 3) アレルギー性鼻炎に麦門冬湯

[症例] 57歳、男性(自験例) 今年(昭和62年)は暖冬異変でアレルギー性鼻炎を起こすのが例年より早い人が多い。2月5日の午前、突然私は激しくくしゃみの発作に襲われた。下のほうから何か突き上げてくるようなくしゃみが続けて出る。同時に強く咳込む。鼻をかんでしばらくおさまっているかと思うと、たちまちまた激しくくしゃみと咳が込み上げてくる。のどがつまり、呼吸ができなくて、エーッとあげそうになる。すぐ鏡を見ると、顔が赤くなり、目が充血して、鼻水をたらしている。見られたものではない。そのとき私はこれこそ麦門冬湯証と考えた。大塚敬節にならって以前使ってみたが、効いたことがなかった。しかし今度はこれしかないと考えた。急いで麦門冬湯エキスの少量を白湯に溶いて服用する。通常の1/3程度にとどめたのは、正証なら少量でも有効であろうと考えたのである。結果は的中した。服薬後およそ10分でくしゃみも咳も止まり、それきりでなかった。[考案]『漢方診療医典』麦門冬湯は「気の上逆によって、咽喉部の刺激感、乾燥感、痙攣性咳嗽などが起こるものによいのである。くしゃみの頻発する状態があたかも痙攣性咳嗽と似ていることから、これを大逆上気の証として、アレルギー性鼻炎のくしゃみに用いるのである。小青龍湯は鼻汁が流れるほどであり、本方はあまり鼻汁の多く出ないのが特徴である。その限界が判然としないこともある。小青龍湯証と思って効かないときに本

方を与えて卓効をうることが多い。」(松田邦夫)

## IV. 鑑別処方

### 滋陰降火湯

乾性咳嗽に用いる点は類似する。この方の咳は亜急性から慢性が多く、間歇的で発作的ではない。吐きそうになるほど激しくなく、空気が乾燥して、身体が温まると咳が出やすい、夜布団に入って、しばらくすると咳込むなどの特徴がある。また、皮膚粘膜に潤いがなく萎縮傾向、便秘傾向(兔糞)などを認めることも参考になる。効果は比較的緩慢である。

### 麻杏甘石湯

気管支炎、気管支喘息で鑑別が必要。この方は、粘稠な痰が多く、喘鳴を伴うことが多いが、ときに痰の少ないこともある。胃腸虚弱者には使用しない。

### 小青龍湯

上記と同様に気管支炎、気管支喘息で鑑別が必要。この方は、アトピー素因の強い例に用いる機会が多い。多くはアレルギー性鼻炎を伴う。湿性咳嗽で水様性の痰が多いこと、それによる喘鳴が聴かれること、冷え症でむくみややすい体質であることなどを目標にする。

### 清肺湯

慢性気管支炎に用いる。粘稠な痰が多い。嘎声を伴うこともある。体質は中等度である。

### 半夏厚朴湯

咽喉になにかが詰まったような息苦しき(咽中炙癢)を目標にする点で類似することがある。

### 竹茹温胆湯

粘稠な痰が出て咳込む、不眠、微熱が残るという者に用いる。